

○ 石垣牛流通協議会が林芳正総務相を表敬、5年間の活動の歩みを報告

石垣牛流通協議会の植村光一郎会長（ニイチク監査役）と笹英典副会長（エムアイフードスタイル執行役員商品統括本部長）は13日、総務省の林芳正大臣を表敬訪問し、ことし3月に協議会が発足5周年を迎えることを踏まえ、この5年間の活動を報告するとともに6月26日に東京都内で開かれる総会への出席を要請した（＝写真左から、林大臣、植村会長、笹副会長）。

林大臣は農林水産大臣（54期・57期）時代に日本産和牛の輸出に尽力し、ベトナム、イギリス、香港のイベントで大臣自らトップセールスを行った。こうしたなかで同協議会の活動に賛同しており、2023年5月の第3回総会に出席するなど、農林水産大臣の職を離れても協議会との深い縁が続いている。植村会長は今回、新型コロナ禍によって島内の「石垣牛」の需要が激減したことを踏まえ、首都圏に販売チャネルを拡大していくべく、7業種（食肉卸、百貨店・量販店、専門店、ホテル、通販、外食、食肉処理業）による協議会が設立されたことを説明。その後、中山義隆石垣市長への応援要請や、林大臣への表敬訪問（活動報告）と総会出席など5年間の歩みを報告した。また、笹副会長からは石垣和牛を使用したコンビーフが贈られた。植村会長らの報告を聞いた林大臣は、これまでの協議会との思い出を語りながら、今後のさらなる活躍にエールを送った。

さらに植村会長は、林大臣の地元である山口



県の「見島牛」について、粥みどりや（山口県萩市）の協力のもと、17～18日にエムアイフードスタイル日本橋三越本店と銀座三越店で販売されることを紹介した。「見島牛」は西洋種の影響を受けていない日本の在来牛のひとつ。1928年に国の天然記念物に指定されているものの、市場に流通するのは年間数頭程度の“幻の牛肉”とされる。植村会長は、ハンガリー固有の希少種「マンガリッツア」が、「国宝」に指定して守ることで、絶滅の危機から脱して頭数が回復したことを例に、「見島牛」についても、今後は流通協議会を立ち上げるなどして再生産が可能な流通体系に組み入れることで、この貴重な在来牛の保護と生産振興を図っていく必要があると訴えた。林大臣も「見島牛」の生産地を訪問したことを踏まえ、今後の展開に期待を示した。